中途半端な異世界渡りの果てに

瑞香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中途半端な異世界渡りの果てに

【Ｎコード】

Ｎ７５４７Ｘ

【作者名】

瑞香

【あらすじ】

近隣諸国への侵攻を始めた魔族領の王を倒すために、魔王討伐隊が魔王の居城を訪れていた。その中層で彼らを出迎えたのはどうにもその場に似つかわしくない人物で―――。王道の魔王退治と異世界トリップ、いずれのジャンルにも初挑戦の若輩者が勢いで書いてみる妄想ストーリー。物語りは討伐隊を迎える謎の人物の視点で語られます。

お客様は心を尽くしてお出迎えしましょう

我ながら、中途半端に運が悪いと思うんだよねぇ。

それが、ユーイが討伐隊御一行様を前に抱いた感想であった。

ユーイが任されているここは、恐れ多くも魔王様のおわします城――いや、塔というべきか――の中層にあたる場所である。魔王のいる上層へ続く扉はユーイの背後にあり、眼前には魔王を倒しに来た討伐隊の面々が。

面子は情報通りのようだ。さすがは討伐隊に選ばれたエリート様方。下層の連中では一人も削ることは出来なかったらしい。

「……ちっ、役立たずの雑魚共め」

おっと、つい心の声が。幸いにも討伐隊の人間達には聞かれなかったようで、彼らは未だこの部屋に現れた時のまま、一様に戸惑いの表情を見せている。彼らが驚くのも無理はない。下層には下級・中級の魔物がわんさかいたはずだ。それに対して中層のこの部屋にいるのはユーイ一人だけ。そして遺憾なことに、ユーイはどこをどう見ても強者には見えないのだ。

討伐隊の面々は視界を遮るもののない広い石造りの部屋を各々見渡している。おそらく騎士は物理的な罠の、魔術師は魔法的な罠の有無をそれぞれ確認しているのだろう。だがそれも徒労だ。この部屋にそんな気の利いたものは無い。

彼らもそれを理解したようで、小声でこの空間の異様さについて相談し合っている。

「おい、道を間違えたんじゃないだろうな。上へ続く部屋はここ、なのか？」

堅物そうな仏頂面の騎士が惑いも露わにそう言えば。

「下の部屋にはあの扉以外は無かったわ。合ってる…のではないの？」

可愛らしい金髪碧眼の、しかしやけに戦場に馴染む雰囲気を纏った勇ましいお姫様が騎士に答えながらも魔術師へ問うような視線を投げかけ。

「下階にもこの階にも通って来た扉以外は呪術的な仕掛けは感知されません」

温厚そうな好青年風の魔術師はそう答えながらも未だあたりを見回している。

ひとつ言っていいですか。貴方方、小声で話してるつもりでしょうが、会話丸聞こえですよ。なんもない部屋なんですから、響くに決まってるじゃないですか。

そのことにも気付いていないのか気にしていないだけなのか、互いに視線を交差させた後、彼らはその中心に立つ人物へ請うような眼差しを向けた。

その様子から見ても中心の彼が討伐隊のリーダーとみて間違いな

いだろう。
先に聞かされた情報によれば、討伐隊のリーダーはこの魔族領に隣在する国の皇太子のはずだ。他領への侵攻を始めた魔族の討伐を提唱した国王の長子で、その温和で親しみやすい人柄による人気と魔法剣士としての力量で名高い、この状況ではいわば“勇者様”たるポジションの人物だ。

皇太子で魔法の実力も建議の実力も本物で、おまけに対面して知ったけれど美形ときた。なんだこれ。これで本当に性格まで良かったらまさにチートってやつだな。どこの世界の神にも“二物を与えない”という常識はないらしい。神よ爆発しろ。

その勇者様もとい皇太子様は、部屋に入ってきた時からずっとこちらを見ている。他の三人に偵察を任せているのか、全く視線をそらさずユーイを凝視している。その目にあるのはほかの面々と同じく動揺と…あとは何だ。読めない何かが宿っている。そんな目でユーイを見ている。
この部屋に彼らの敵はユーイしかいないのだから、その敵に注意を凝らすことは間違いではない。間違いではないのだが…見すぎではないだろうか。残念ながらユーイの容姿は目を奪われるほどのものではない。平凡も平凡、可愛くも美しくも、醜くもない。特徴が無いのだ。性別さえ迷われることもあるほどの中庸っぷりだ。だから王道の“敵側の女の子に一目惚れ★”的展開はまずありえない。第一皇太子は明らかにそんな怪しい目はしていない。
では何なのか。まさか好感度皇子たる者がしょっぱなからガンつけてるのか。喧嘩を売っているのか。そうかそうか。なるほどな。

だが断る！

確かにユーイは敵方で、魔王へ続く道の中層に在るが、与えられ

た役割は討伐隊に喧嘩を売るもしくは買うことではない。ましてや迎撃でも、殲滅でもない。
ただし、戸惑いをみせる討伐隊の現状はユーイが与えられた役割を全うできている証だ。つまり既に主の意向に沿うことが出来ているということだ。なんという好調な出だしだろう。

内心我が僥倖に浮かれている――その実表情は微笑みの形を維持している――ユーイに、今まで無言だった皇太子が初めて口を開いた。

「…君は、なに？」

ふむ、正しい問いかけだ。皇太子はヒトを見る目があるらしい。
そういえばユーイも彼らが来てから一言も口をきいていない。来客を出迎えて挨拶もしていないなど、とんだ失礼をしてしまった。

「ようこそおいでくださいました。上層への道は、此処でお間違いございません。
人間の皆様のお相手をさせていただきます私は、我等が魔族領第二皇子ジールーン様が配下、ユーイと申します。どうぞお見知りおきを」

口上と共に深々と頭を下げる。
見なくとも気配で彼らが驚いているのがわかって、ついほくそ笑む。術でこの部屋の様子を観覧している主も、きっと今頃この状況を楽しんで笑んでいるだろう。いつものあのいやらしく、不快で下品な笑みを浮かべているに違いない。

顔を上げて再度微笑みかければ、相手方の戸惑いは一層大きくなっていた。

「…あなたは今“お相手”と言ったけれど、どう見ても私達の“相手”が出来るようには見えないわ」

私の口上にまず反応してくださったのはお姫様だ。

「この部屋にはなんの罠も無いようだし、それに、あなたは…その…」

言葉尻が曖昧なのは、感覚的にも理論的にも導き出している答えにそれでも疑いが晴れないためだろう。さんざん戸惑わせている上に、今からも迷惑をかける詫びの意もかねて少し惑いを解してあげよう。

「はい、私は魔族ではありません。魔力は持ちませんし、戦士でも魔術師でもありません」

そう、私にはなんのスキルもない。彼らもそのことをそれぞれの感覚で察知しているからこその反応なのだろう。

ようやく困惑から立ち直ってしまったのか、皇太子がその麗しいご尊顔に笑みを湛えてさらに問いかけてくる。

「でもまさかこんな所で会話の相手をするわけでもないよね？」

「そうだ、普通に考えればここで俺達を迎えるべきは中級か上級だ

ろう」

続けて騎士も問う、というよりは確認するような口ぶりで言う。その表情は先にもましていぶかしげなむっすり顔だ。よし、彼のことはこれからむっすり騎士と呼ぼう。

むっすり騎士の意見は正しい。つまり主の采配こそが間違っているはずなのだ。

「その通りでございます。

下級の魔族ほどの力も持たない私がこの場におりますのは、主の趣向にございます」

「趣向？」

「はい、主は祭の準備があるということで、それまで私が皆様のお相手を務めるようとの仰せです」

「……それってつまり、足止めってこと？」

まさにそれである。だがそれだけではない。

趣向、なのだ。

と、大人しくしていた魔術師が確信のこもった目でユーイを見据え、言う。

「…でも、貴方、人間ですよね？…なんだかちょっと変な感じがするけれど。」

おそらく黙っている間に私の存在を分析していたのだろう。魔力

を持たない身ではわからないが、魔術で探られたに違いない。
それは魔法剣士たる皇太子も同じだったようだ。魔術師と似た意思を持つ目でまた見つめてくる。

キャッ、えっちぃ！そんなに見つめて惚れちゃっても知らないんだぜ！
なんて場違いな冗談は口には出しませんよ。ええ。空気を読むという魔力いらずの魔法を通常装備している国民性を馬鹿にしてはいけない。

「ええ、私は人間です。ちょっと変ですが」

私は人間。先に言ったように魔族ではない。魔力も持たない。だけどこの魔族と人間との争いの場に、魔族側として在る。

ああ、なんて中途半端。中途半端な私がここに立っている。

これこそ主の趣向。

私の答えに戸惑いと共に警戒の色を強める討伐隊の方々

これもまた主の趣向。

…事態が主の思惑通り過ぎて不快になってきた。

「なぜ、人間の、それも戦力を持たない貴方がこんな所にいるの？
それも、そんな恰好で」

おお、唯一主の掌の上から片足を踏み出しているのはニコニコ笑顔の皇太子様。さすがは皇太子様。既に怪訝な表情などそのご尊顔のどこにもない。むしろ楽しそうな光さえその瞳に宿していらっしゃる。

やはりチートはあんな小物の思惑にいつまでも嵌ったままではいないのですね。ちょっとだけ見直しました。見直すも何も、元々見下げても見上げてもいないけれど。

ところで皇太子様のみならず討伐隊の皆様が疑問視されている様子のユーイの格好だが、まぁあれだ。メイド服、というやつだ。注意しておくがスカート丈は膝下である。もう一度言う。膝下だ。決して膝上２０？の絶対領域メイド服などではない。あれは美脚の人間がすべき格好である。さらに念を押しておくとこの格好はユーイの意思ではない。仕える者としてこうあるべきと主に言われて仕方なく着ているのだ。あしからず。

いずれにせよ、戦いの場に不似合なことに変わりはない。

が、「戦力を持たない」というのは見込み違いである。

「それはもちろん、“お相手”をさせていただくためでございます。

確かに私には魔力も武術の心得もございません。

しかし主の仰せでありますれば、それに従うのが配下の勤めにございます」

そう答えつつ、右手の中指に嵌めた指輪――性格にはそこに据えられた紅い石に意識を集中させる。

「私が主より承りました命は二つ…一つは皆様の困惑を主に届けお楽しみいただくこと、そしてもう一つはまさに足止めのお相手をすること、です」

私には強力(ごうりき)はおろか、魔力の欠片も無い。

私の中には。

しかし扱うことも出来ないなど、誰が言っただろう。

魔力の流れの変化に真っ先に気付いたのはやはりというべきか、魔力を以て戦う皇太子様と魔術師の二人。魔力保有量が高く手練れである彼らには、指輪からあふれ始めた魔力が私の身体を覆う様子が見えているのだろう。

「――――っ！？ジル、リーチェ！」

自らも両刃の魔法剣を構えながら皇太子様はむっすり騎士とお姫様を呼ばわった。なるほど、むっすり騎士はジル、お姫様はリーチェというのか。

両者もさすがに場の雰囲気の変化を感じ取ったらしい。むっすり騎士ことジルは打撃力のありそうな鋼の剣を、リーチェ姫様は腰の両側に佩いた細身の双剣を抜き放つ。

魔術師は早速防御魔法の展開準備を始めている。仕事が早いな。

先程まで戦場に不釣り合いな空気を有していた部屋に、一気に相応しい緊張感が満ちる。

「皆様どうぞ時間の許す限り、我が主の悪趣味な趣向にお付き合い

下さいませ」

しまった。またつい本音が。

お客様は心を尽くしてお出迎えしましょう（後書き）

ここまで書いて力尽きました。こんなに長々書くつもりはなかったのに…
なにこの終わり方。続きはバトルシーンにでもするつもりか。なんと無謀な！
なんでこうなった。

＊誤字・脱字を発見されましたら是非お知らせください＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7547x/

中途半端な異世界渡りの果てに

2011年10月20日06時07分発行